

アンドレ・ブルトンの『ナジャ』の精神分析的読解

加藤 彰彦

アンドレ・ブルトンの『ナジャ』は、その本体が「私とは誰か」で始まり、テキスト中においてもその種の問いかけが繰り返されることから、自己同一性の探求の書であるという読み方がされてきた。その読み方の正当性を一方で認めつつも、ナジャの物語がナジャの不在を意味する問いかけで締め括られることから、ブルトンの自己同一性を明らかにするナジャが不在であるということは自己同一性の探求の失敗を意味するとともに、それが敢えて書かれたことから、自己同一性の探求とは全く違った観点でもって『ナジャ』を読み解くことの必要性和正当性を示したのが本論考である。本論考において提示された観点とは、精神分析である。あたかもブルトンが精神分析医であり、ナジャをその患者とする精神分析の治療の記録として読むことが可能であると考え。自己同一性の探求として捉えられていたものは、精神分析で言うところの転移として理解される。更に『ナジャ』のテキストを貫く重要な点は、ナジャの物語の最後が声によってナジャの現前の確認がなされているということから、声によって明らかになる現前であり、『ナジャ』のテキスト、特にナジャの物語は精神分析の治療として発せられたパロール(話し言葉)によって構成されているのである。そしてナジャが不在となり、現前を欠くということから、パロールは不可能になり、不在の者に向かって成立するエクリチュール(書き言葉)がそれにとって代わるが、そのエクリチュールによってナジャの物語以降のエピローグの部分も付け加えられ、『ナジャ』というテキスト全体が完成するのである。

キーワード：『ナジャ』、精神分析の治療の記録、自己同一性と転移、声と現前、パロールとエクリチュール

序章

アンドレ・ブルトンによって書かれ、1928年に初版が刊行され、1963年に全面的な改訂版が刊行された『ナジャ』について、その本体が「私とは誰か」(PI p.647)¹⁾という書き出しで始まるため、このテキストをブルトンの自己同一性を求める探求の書と捉える読み方がある。そもそも1928年の初版においては、我々が現在プレイアード版において『ナジャ』として捉えている1963年の全面改訂版に添えられている「序言(遅れた至急便)」は存在しないため、『ナジャ』のテキストのまさに冒頭がこの「私とは誰か」という問いかけであったのであるから、そのような読み方は至極正当のものであつただろう。更に言うなら、ブルトンは1927年の8月、ヴァランジュヴィル・シュル・メールの近くのアンゴの館に滞在して『ナジャ』の最初の二つの部分、つまり現在我々が『ナジャ』として捉えているテキストのプロローグとナジャの物語の部分を書くわけであるが、その最初のプロローグの部分を1927年の秋に『コムルス』の13号において

発表している。そしてこの年の12月にエピローグの部分でブルトンは書くに至るわけである。

このように見ていくならば、冒頭の問いかけの部分で当時のブルトンにとっていかに重要なものであったか理解できるわけであり、その問いかけに従って『ナジャ』を読み解くことも当然のことなのである。例えば、マルグリット・ボネはこの点について「ブルトンは作品全てを組織化する問いをまず提示する」(PI p.1497)と捉えるわけであるし、ピエール・アルブーイは「『ナジャ』における記号と信号」において、この問いかけの意味を引き出しているわけである。

このように『ナジャ』をブルトンの自己探求の物語であるとするならば、つまり自分の求めるものを最終的に得られるかどうかは別にして、それを求める試練と挫折といった構造を持つ物語であると理解するならば、当時の様々な批評が出現した中であってポール・モランが1928年11月10日の『文学便り』において「『ナジャ』とは小説である。」(PI p.1518)と評したことも的外れではないだろう。確かに『ナジャ』はブルトンによって書かれたシュルレアリスム的な小説であるとする文学史的な記述も存在するのである。

また、この「私とは誰か」といった問いかけがブルトン独自のものであり、シュルレアリスムを特徴付けるものであるとすることも、いささか無理があるとも考えることも可能である。ブルトンにとって盟友であったルイ・アラゴンによって書かれ、近年マルク・ダシーによって編集された『現代文学史計画』の中にある文芸時評的な文章の中で、アラゴンは「私とは一体何者であるのか」(PH p.145)²⁾という問いかけを冒頭にしているのだ。これが書かれたのは1922年で、当時アラゴンは26歳であった。第一次世界大戦後の社会の混乱の中であって、自らの身の置き場を考え、自分とは何者であるかを考えるといったこの精神構造は、むしろ当時の若者たちにとってごくありふれたものであったのかもしれないのである。あるいはシュルレアリストである彼らこそがこのような社会の混乱において価値の問題に敏感であったのかもしれないということは言えるだろう。

さて、このような自己同一性を求める試みが『ナジャ』においてどのような展開を見せているかについては第一部において詳述する予定であるので、ここでその問題に入っていくことはしないのであるが、果たしてこの自己同一性を求める試みにブルトンは成功したのであろうか。成功していなければならないと我々は主張するものではないが、いわゆるナジャの物語の最後の部分においてブルトンが次のような発言をする時、『ナジャ』を自己同一性の探求という観点から読んでいくことが正しかったのかどうかという疑問が出てくるのである。つまり結末部分は次のように書かれているのである。「仮にそれが詭弁であったとしても、少なくとも私自身に、最も遠くから私自身を出迎えにやって来ている者に、〈誰だ〉という相変わらず悲痛な叫びを発することができたのはそのおかげなのだ。誰だ。あなたなのか、ナジャ。別の世界(下線原文)、全く別の世界がこの現実にあるというのは本当なのか。私はあなたの言っていることが聞こえない。誰だ。私一人なのか。私自身なのか。」(PI p.743)

ラカンも指摘しているように、主体とはもともと二者が合体したものであり、それが分かれてしまったがために、片方がもう片方を探し求めるという風に考えるならば、この結末部分から明らかになることは、この自己同一性の探求の試みは失敗であったということにはなるだろ

う。ただし、そのように考えるならば、『ナジャ』の第三部、つまりナジャの物語が終わった後のエピローグの部分において登場する「君」という女性、具体的にはシュザンヌという女性が当時のブルトンにとっては探し求めるべき片割れであって、確かに『ナジャ』において登場し、まさに理想の女性として表現されているわけであるから、全てはシュザンヌに向かうということでもよかったのである。しかし『ナジャ』の構成上そこまで徹底されていないし、そもそもそれでは『ナジャ』の大半を占めるナジャの物語とは一体何であったのかがわからなくなる。つまり我々はここにおいて、冒頭にブルトンによって投げかけられた「私とは誰か」という問いかけでもって『ナジャ』を読んでいくことが間違いだったのではないかということに気付かされるわけである。そして我々はナジャの物語の結末部分において示された「誰だ」という問いかけから『ナジャ』を読み直してみることが必要なのではないかと思いつけるわけである。確かに我々は第一部において自己同一性という観点から『ナジャ』を読んでいくことのある種の正当性を検証したいと思う。つまり自己同一性という観点で『ナジャ』はほぼ読めてしまうと言ってもいいくらいであり、テキストの随所にはそのように読むべきであるという信号も散りばめられているのである。しかしナジャの物語の結末部分において示されていることは、ただ単に自己同一性の探求の試みが失敗であったという意見表明ではなくて、肝心のナジャ自身の不在ということが問題になっているのである。そして更には、ナジャの物語が終結した後、エピローグの形で『ナジャ』の第三部が展開されるわけで、自己同一性とは違った観点から『ナジャ』を読んでいかなければ、このあたりの展開は理解できないに違いない。

先回りして言うなら、我々は精神分析という観点から『ナジャ』を読んでいくことを考え、第二部において詳述する予定である。もっとも精神分析において認められる転移という概念は、自己同一性と深く繋がりのあるものであって、このことから自己同一性の探求という読み方が全く的外れのものではないことも明らかとなるであろう。この精神分析という読み方は、更にデリダの言う音声中心主義、現前の哲学へと広がりを見せることになり、話し言葉であるパロールと対概念であるエクリチュールが問題となってくる。エクリチュールという観点を得ることによって、ナジャの物語が終結した後、ブルトンは『ナジャ』の第三部、つまりエピローグの部分で何を書こうとしたのか、更には1963年の全面改訂版において添えられることになった「序言」において、本を書くということの問題視せざるを得なかったのかというあたりが自ずから明らかになってくると思われる。

第一部 『ナジャ』を自己同一性という観点から読む

第一章 「私とは誰か」という問いかけから『ナジャ』を読む

『ナジャ』の本文の冒頭に示される「私とは誰か」という問いかけは、ただ単に意味もわからず漠然とした不安の中で発せられたものではない。マルグリット・ボネによると、このような問いかけはブルトンにとっては以前からあったようで、1916年8月以降のことで、この時ブルトンは20歳ということになるが、テオドル・フランケルに「ああ、しかし、私とは誰なのだ。」(PI p.1523)と書き送っているし、1920年の10月24日には、後に妻となるシモーヌに「私とは誰か。」(PI p.1523)と同様に書き送っているのである。確かにブルトン自身のテキストを

見れば、このような「問かけが年とともに深まっていった」(PI p.1523)のである。それは『ナジャ』のテキストにおいても明らかであって、言わば根拠となる理論も示され、何を知りたいと思っているのかという対象のようなものも見えているのである。

『ナジャ』においてこの問かけの後、ブルトンは次のように説明する。つまり「仮に例外的に私がそれについての格言に頼ったとしよう。それというのも、要するに私が〈交際している〉のは誰かを知ることじゃないのかということなのだ。この〈交際する〉という言葉は、ある特定の人々と私との間に私が考えていた以上に奇妙で、避けることのできない、厄介な関係を打ち立てようとして、私を惑わせるのだと認めなければならない。それは意味するよりも更に多くのことを言っているし、私が生きている間に私に幽霊の役を演じさせ、当然私が誰か(下線原文)であるために、私であることをやめなければならなかったことに言及するのである。」(PI p.647)

ここでブルトンによって示されている格言とは*Dis-moi qui tu hantes et je te dirai qui tu es*。つまり「君が誰と交際しているかを言い給え、そうすれば私は君が誰であるかを君に言おう。」(PI p.1523)で、「類は友を呼ぶ」と同種の内容である。

友達を見ればどういう人かがわかるというものだが、ブルトンの意図するところはもう少し複雑で、精神分析の転移によって説明できるものである。つまり、私が私であるためには私以外の誰かにならなければならない、それは欲望を介して可能になるのである。精神分析については第二部に譲るとして、ブルトンがブルトンであるために誰と関わらなければならないかという観点から『ナジャ』は展開されていくと考えられるわけであるが、それはあくまで手段という一つの過程として問題にされるものであって、最終的にブルトンの求めるものは独自性とも言うべき自己同一性なのである。この点について、ブルトンは次のように明らかにしている。「重要なのは、私がこの世で徐々に私の中に発見していく個々の適性があるからといって、私に固有のものであろうが私には教えられていないある漠然とした適性の探求から気をそらされるということは全くないということなのだ。私についてわかっている好み、私について感じる類似性、私が受けている誘惑、私に起こりかつ私にしか起こらない出来事、あらゆる種類のそうしたものの向こうに、私がすることになる運動、私一人が感じることになる心の高ぶり、多くのそうしたものの向こうに、他の人たちと比べて、私の差異が、何に起因するかでないとしても、何にあるのか知ろうと私は努めている。他の全ての人たちの中であって私はこの世に何をしにやって来たのか、私の責任でしかその運命に応えることができないとすれば、私はいかなる独自の使命を担っているのか私がそれに気付くのは、私がこの差異を自覚すればする程正確になるのではないか。」(PI p.648)

つまりフェルディナン・ド・ソシュールが言うように、記号それ自体には意味がなく、他の記号との差異によって意味が示されると考えるならば、私が私であることの意味は他の人たちとの違いによって示されると考えられるわけである。そしてこのように考えるならば、それこそ日常生活における食事の好みといったようなことで他の人との差異を見出し、それでもって私が私であることの意味を見出さなければならなくなるが、もちろんそのようなことは問題にはならない。確かにそれもまた私の一部であるとすることは可能であり、それを含めての私

なのであるが、ブルトンの求めるものはそれよりも大きく、容易には見つけることができない謎のようなものとして存在するわけである。従って、出発点として「私とは誰か」という問いかけが為されるのであるが、ブルトンが「人生は暗号のように解読されることを望んでいるかもしれない。」(PI p.716)と書くように、人生の中に謎を求めての「精神の最大の冒険」(PI p.716)が展開されるわけである。そしてその過程において、謎が見出されたか、あるいは謎が解明されようとする時点において、再び、あるいは数度にわたって発せられるのが「私とは誰か」といった問いかけかあるいはその変奏ということなのである。

まず既に指摘したようにこの『ナジャ』の本文自体が「私とは誰か」という問いかけで始まり、このテキストの方向性を示唆するわけであるが、ブルトンがナジャと出会った1926年の10月4日において、早々とブルトンはナジャに問いかけるわけである。つまり「まさに立ち去ろうとしているところで、私は他の全てを要約する一つの質問、それをするのは私しかいず、恐らく、しかし少なくとも一度はそれに比肩する答えを見出した一つの質問を彼女にしたいと思う、つまり〈あなたは誰か〉、すると彼女は、ためらいもせず、〈私はさまよえる魂です〉」(PI p.688)

もちろんこれで解決というわけではないから、ブルトンは翌日もまたナジャと会うことに決めるのである。従ってこの探求は続行されるわけであるが、10月6日において、今度はナジャの方がブルトンに問いかけるのである。「ここじゃない…でも、ねえ、何であんたは牢獄に行かなくちゃいけないの。あんたは何をしでかすことになるの。私だって牢獄にいたのよ。私は誰だったの。何世紀も前。それで、あんた、その時あんたは誰だったの。」(PI p.697)

要するにこれは前世の記憶であって、ナジャはマリー・アントワネットの時代において生きていたのだ。だからこそ、ブルトンは次のように説明する。「彼女はマリー・アントワネットの側近の中で、誰であり得たのか自問している。」(PI p.697)

このように考えるならば、今度はブルトン自身もマリー・アントワネットの時代において側近の一人であったかどうかは別にして、共に時代を生きた一人の男であったと推測することは可能だろう。何か謎の一部が解明されたかのような思いも抱かされるわけであるが、ある人物が実は別の時代において表面的にせよもう一人の人物であったと指摘されることは、あたかも問題の解決に至ったかのような気にさせられることは事実である。もちろんこれで全て解明されたわけではないから、ブルトンの謎解きは依然として続行されるわけである。

そしてブルトンがナジャとほぼ毎日会い続け、それが10月4日から12日までの日記形式で書かれている部分の後、ブルトンはナジャと会うことを、少なくとも毎日会い続けることをやめるのであるが、その時点においてブルトンは本格的にナジャについて考えるようになる。つまり「本当のナジャとは誰なのか」(PI p.716)という問いかけである。『ナジャ』の冒頭における「私とは誰か」という問いかけが「ナジャとは誰か」という問いかけに完全に摩り替わっていることにまず注目しなければならない。そしてその問いかけも言わば哲学的といったものではなく、現実的な次元においてナジャの本当の姿を探ろうとするものなのである。

実際テキストにおいては「本当のナジャとは誰なのか」という問いかけの後に、ブルトン自身によって考えられたいくつかの可能性が示されているのだ。「私はどんなものか知らないが石の遺跡を探しに、フォンテーヌブローの森の中を、ある考古学者と一緒に、一晚中さまよっ

たと私に断言しているナジャなのか、まあそういうものを発見するのに適した時間というのは昼間じゃなかったのかと思うが——しかしもしそれがその男の道楽だったとしたら——私としてはこう言いたいのだが、通りで、彼女にとって唯一の価値ある経験の場である通りで、大いなるキマイラに対して投げかけられた全ての人間の問いかけが届くところにいることしか好きではなかった常に靈感を受けそして靈感を与えている女性なのか、あるいは（何故それを認めないのか）時には逮捕されていた（下線原文）ナジャなのか、何故なら結局のところ他の人たちは彼女に言葉をかけることは許されていたと思っていたわけだし、彼女の中に全ての女性の中で最も貧しい女性、全ての中で最も身持ちの悪い女性しか見ることができないでいたからなのだ。」(PI p.716)

ここにあるものは最早自己同一性を探るためのあれやこれやの試行錯誤といったようなものではなく、ブルトンにしてみればこのような女性とはつきあいたくないという思いの表われにすぎないのである。そしてテキストにおける箇所としてはこの「本当のナジャとは誰なのか」に先行するのであるが、ブルトンはナジャとの関係において自分たちにもその問いかけを繰り返すのである。「現実、私が今悪賢い犬のようにナジャの足元で横になっているのを知っているこの現実の前で、私たちは誰だったのか。」(PI p.714)

これも同様に自己同一性の探求といったものではなく、こうやってつきあっていくことができるのかどうかという後ろ向きの思いと考えることができるだろう。そしてこの後、ナジャの物語の結末部分においての例の「誰だ」という問いかけになるのである。二度と「私とは誰か」という問いが繰り返されることはない。敢えて付け加えるならば、ナジャの残したデッサンの中に「彼女とは誰か」(PI p.725)という問いかけが書き込まれていて、ナジャの中にあっては問いかけは依然として存在し続けているのだということは言えるかもしれない。

自己同一性という観点に則して言うなら、ナジャの物語の後のエピローグの部分において、ドゥルイ氏の話が出てくることに注目しなければならない。この話については、マルグリット・ボネも指摘しているように、「様々な解釈」(PI p.1559)をもたらしたのである。ブルトン自身この話については「一つの非常に馬鹿げた、非常に暗い、非常に心を揺さぶる話」(PI p.749)と表現しているように、自己同一性を探求することが、一方で感動的なものでありつつも、実情としてはかなり重苦しいものであることを認めなければならない。この話の中でドゥルイ氏が「非常に動揺した一人の男が、服は泥だらけで、血まみれで、そしてほとんど最早人間の顔ではない状態で」(PI pp.749-751)自らをドゥルイ氏だと主張するのであるから、自己同一性の根拠というものは自己意識の中にあるということになるのであるが、これで問題は解決したと言えるのであろうか。

第二章 「私とは誰か」は「私は誰につきまとうのか」

『ナジャ』の本文の冒頭にある問いかけはQui suis-je?で、これを日本語に訳すと「私とは誰か」になるわけである。この場合、suisというのはêtreの直説法現在の活用形であるが、同じ活用形を持つものにsuivreがあり、訳語としては「(誰か)の後について行く」「(誰か)の後をつける」「(誰か)につきまとう」というものや、「(道・方向など)をたどる、行く」「(教えなど)に従う」

「(議論・考えなど)についていく」「(授業・講義)を受ける」といったようなものがある。既に触れたように、ブルトンはこの冒頭の問いかけの後にhanterという言葉を持ち出してきているわけで、このhanterには「(幽霊が) 出没する」「(妄想などが) 取り付く」「(どこか) に足しげく通う、交際する」という意味があるのであるから、suisをêtreの活用形ではなくて、suivreの活用形であると理解することは不可能ではなく、むしろその可能性を探ってみる必要があるだろう。もっともこの問いかけは第一章において述べたように、例えば「あなたは誰であるのか」「君は誰だったのか」「本当のナジャは誰なのか」といった問いかけに変奏されていくわけであるから、Qui suis-je?のsuisがsuivreではなくてêtreの活用形であることは揺るぎないものとして考えるべきだろう。しかしそれでもsuivreの活用形としての意味合いを含んでいると考えることができるのは、hanterという動詞にブルトンがこだわっているだけではなく、ブルトンがナジャと毎日のように会っていた10月4日から12日までの記述の後に展開されるブルトン自身の思いの中に、次のような箇所が見受けられるからである。「ここでこの死に物狂いの追求が終わるといふことがあり得るのか。何の追求か、私は知らない、しかし精神的な誘惑の全ての技巧をこのように利用するための追求 (下線原文) なのだ。」(PI p.714)

原文ではイタリック体で示されているこの追求はpoursuiteであり、この動詞形がpoursuivreである。意味としては「(何か) を追いかける」「(誰か) につきまとう」「(目的・理想など) を追い求める」となっている。つまりQui suis-je?を「私は誰につきまとうのか」あるいは「私は誰を追い求めるのか」という風に理解するならば、まさにブルトンの試みが追求であったといふことで符合するのである。

このことから我々は『ナジャ』のテキストをsuivreもしくはpoursuivreといった言葉から見直してみることを試みた。まずブルトンがナジャと出会う10月4日のことであるが、ナジャと出会う直前の様子として次のような箇所がある。「目的もなく私はオペラ座の方向に私の歩いてきた道をそのまま歩き続けていた。sans but je poursuivais ma route dans la direction de l'Opéra」(PI p.683)

単なる日常的な描写であって、深読みする必要もないかもしれないのであるが、結局のところこの道を辿っていたことによってナジャと出会うわけであるから、ブルトン自身自分がそれまで試みてきたことの正当性をここに読み取ることも可能だろう。次に同じく10月4日の出会いの中でブルトンとナジャは議論らしきものをするのだが、その中に次のような箇所がある。「これらの歩みは順調に最後には一本の道を描くだろうし、この道については辿ることができなかった人たちceux qui n'ont pu suivreを自由にするか自らが自由にするのを助ける方法が明らかにならないかどうかは誰が知っているのか。」(PI pp.687-688)

ここではブルトンにとって自己同一性というよりもシュルレアリストとしての活動を見て取ることができる。もちろんそのような活動をするに於いて自己同一性を求めるということも、理解としては可能である。次に10月5日の出会いの中で、ブルトンが持ってきた自らの本を読んだナジャがその中であつたジャリの詩に関連して次のような反応を示す。「彼女はこの森の近くを通る詩人を見ている、まるで遠くから彼女は彼の後をつけることができるようだ。on dirait que de loin elle peut le suivre」(PI p.689)

ここにおいては、ナジャから見て誰を追い求めていくかということが問題になっている。次に10月6日の記述において、このような箇所がある。「いつもとは反対に、私はショセ-ダンタン通りの右側の歩道に行くことに決める。」(PI p.691)

単に道のどちら側を歩くかだけの極めて日常的な話のように思われるが、ここでまた再びナジャと出会うことになるのである。つまり「私がまさにすれ違おうとする最初の女性の通行人たちの一人が、最初の日の格好をしたナジャなのだ。彼女はあたかも私には会いたくないかのように前に行く。最初の日のように、私は引き返して彼女と一緒に歩く。」(PI p.691)

要するにどの道に行くか、その選択次第でナジャに会うことができるかどうか決まるといえるわけである。ある道に行くということが、実際的な意味と同時に人生の選択という比喩的な意味も併せ持っていることが見て取れるのである。また同日のことであるが、ブルトンの『失われた足跡』の中の「新精神」と題された小文についてナジャは関心を向ける。これはブルトンとアラゴンとアンドレ・ドランの三人が次々に体験したある女性との出会いが記されていたのであるが、結局のところその女性については何もわからないまま見失ってしまったという事実が浮かび上がってくるわけである。この点についてナジャの反応はと言うと、次のようなものである。「時間が過ぎ去ってしまったために絶望的なものにならざるを得なかったこの追跡の結果の失敗 *le manque de résultats de cette poursuite*、ナジャがすぐに気にかけたのはそれなのだ。」(PI p.691)

マルグリット・ボネも指摘しているように、この「新精神」において記されているある女性との出会いは『ナジャ』を予言させるものであり、ここにおいて示されている追跡とはまさにナジャを追い求めるということと同一視されるものである。また同じ日のことであるが、ブルトンとナジャが歩いていた時に、ナジャが鉄柵を両手で握り締めて歩こうとしなくなる。その時のことであるが、「根負けして、私は最後には彼女自身が進んで自分で道を歩いていくことを待つことにする。 *je finis par attendre que de son propre gré elle poursuive sa route*」(PI p.697)

そしてその後、「私は不安になり、そして彼女の手を片方ずつ引き離して、私は最後には彼女に私の後について来るよう強いることにする。 *je finis par la contraindre à me suivre*」(PI p.697)

実際の道を歩いていくことと人生という道を歩いていくという比喩的表現とが重なっているかのような箇所である。ブルトンとナジャの関係がこの表現において窺われることになる。この後二人はチュイルリー公園にやって来るのであるが、「私たちの前で彼女がその曲線を目で追っているように見える *elle paraît suivre la courbe* 噴水がわき上がっている。」(PI p.698)

この噴水が描く曲線について、ナジャは自分とブルトンの考えが一緒になり溶けていく様子を表現していると指摘するのだが、まさにこのイメージはブルトンが読んだばかりの本の中に表われているイメージであって、その奇妙な符合に驚くことになるのである。この後、ブルトンとナジャはセーヌ通りの方に曲がった後、「彼女は改めて非常に放心した状態で、手がゆっくりと描く稲妻を空を見て追っていると私に言う。 *et me dit suivre sur le ciel un éclair que trace lentement une main*」(PI p.707)

ナジャにすれば、この手こそがブルトンのことであると言うのだ。そして10月12日の段階において、二人の状態は次のようなものとなる。「私は彼女の独り言についていくのがだんだん

大変になる。J'ai de plus en plus de peine à suivre son soliloque」(PI p.713)

つまりは結局のところ、ブルトンはナジャについていくことができなくなってくるわけである。当初の試みがこのような結果になったという点に注目すべきだろう。そしてこの結果を受けて、ブルトンはナジャを追い求めるという試みが終わるのかもしれないという既に指摘した思いへと至るわけである。この後ブルトンはナジャが精神病院に入院させられたことを受けて、精神病や精神病院について自らの見解を明らかにするのであるが、その中に次のような箇所がある。「そこから精神病院で注意深く見守ることにのみなり得る非常に悲劇的に素早いこれらの病気の進行があるのだ。De là ces évolutions si tragiquement promptes qu'on peut suivre dans les asiles」(PI p.739)

ここにおいて示されているのは一般例ということであろうが、これはまさにナジャが辿っていくことになる過程を示しているものとも理解することができる。以上のように我々は*suivre*もしくは*poursuivre*という言葉を手掛りにしてテキストを見直してきたわけであるが、冒頭の問いかけである*Qui suis-je?*を「私は誰につきまとうのか」もしくは「私は誰を追いかけるのか」という意味合いとして理解し、そのような観点からテキストを捉え直した場合、そこにはまさにブルトンの追求の過程が見事なまでに浮かび上がってくるということがわかる。それは精神的な領域に留まるものではなく、具体的にどの道を選択し歩くかという極めて現実的な領域においても有効な道しるべとなるものであり、また特定の人物、この場合ナジャという女性であるが、当初はブルトンがナジャを追い求めるという状態であったにも拘らず、次第次第にナジャがブルトンについて行くという状態になることも理解されるわけである。そして最終的にはブルトンがナジャを追い求めている、少なくともその意志があるにも拘らず、ついて行くことができなくなるという状態も明らかとなる。つまり、ただ単に道を歩き、ナジャを追い求めるという段階ではなく、更に進んで精神的領域にまでナジャを追い求めるということができなくなってしまったわけである。

この点について、ブルトンは能力の問題と愛情の有無をその理由として挙げているように思われる。つまり、「私がそれについてどんな欲求を持っていたとしても、また恐らくはどんな幻想を抱いていたとしても、彼女が私に提示していたものに私は恐らく太刀打ちできなかっただろう。」(PI p.736)とも述べているし、また「別れが結局不可能だったかどうかは、私次第でしかなかったのである。」(PI p.718)とも書いている。愛情に関して言うなら、既に10月7日の段階で「もし私が彼女を愛していないのなら、私が彼女に会い続けることは許し難いことである。私は彼女を愛していないのか。」(PI p.701)とブルトンは書いているのである。

しかしブルトン自身が「この死に物狂いの追求」(PI p.714)とか「精神的な誘惑の全ての技巧をこのように利用するための追求」(PI p.714)と書いているにも拘らず、何か唐突とも思える中断はどう理解すればよいのであろうか。つまり我々はこちらにおいて自己同一性の探求という観点からテキストを捉えてきたことの行き詰まりに直面するわけである。自己同一性という観点からテキストを理解することに全ては順調に進んできたはずなのである。ところがブルトン自身この追求がナジャとほぼ毎日のように会わなくなった時点で途切れてしまうことに驚きの気持ちを表明しながらも、それを敢えて断行していることに我々は自覚的であればならな

いだろう。この点に注目するならば、ナジャの物語において、自己同一性の探求の失敗としてのみ捉えることのできない「誰だ」という問いかけがあることの意味を理解することができるはずなのである。つまりブルトンは自己同一性の探求に失敗していないのではないということなのである。

第三章 Je ne vous entendez pas.のentendreの二つの意味

ナジャの物語の中心部分を占める10月4日から12日までのほぼ毎日の出会いの後、ブルトンとナジャは全く会っていなかったわけではなかったのだが、それ程頻りに会うこともなくなり、そしてナジャが精神病院に入ることになって以降、マルグリット・ボネの研究によれば、ブルトンは見舞いにも行っていないということがわかる。もちろん会おうと思えば会える状況ではあるので、それはまさにブルトンの意志の表われと見るべきなのだが、その点を理解した上で、ナジャの物語の結末部分を読むならば、いささか奇異の思いに駆られることも事実なのである。ブルトンにとってナジャの不在は明確であり、そこにはブルトン自身しかいないのである。

更に仔細に検討するならば、Qui vive?「誰だ」よりもむしろ我々が注目すべきなのは次の一文である。Je ne vous entendez pas. (PI p.743) これを訳すならば、「私はあなたの言っていることが聞こえない」「私はあなたの声が聞こえない」ということになるだろう。不在ということ強調したいのであれば、「私にはあなたが見えない」というくらいの表現が妥当なところである。何故聞こえる、聞こえないが問題になるのか。このことから我々はentendreという動詞に注目し、テキストを見直すことにしたい。

その前にまず我々が確認しておかなければならないのは、マルグリット・ボネも指摘しているように、entendreについては「その用語の二重の意味で」(PI p.1500) 理解していくことが重要なのである。つまりentendreについては「(自然に誰それの言うこと、物音) が聞こえる」とともに「理解する」「わかる」というのが意味としてあるのだ。従って、既に指摘した結末部分についても、ナジャの声は聞こえるが、「私にはあなたの言っていることが理解できない」という意味としても十分に成立するわけである。もっとも、その後「誰だ。私一人なのか。私自身なのか。」と続き、締め括られるわけであるから、「私はあなたの声が聞こえない」という訳の方が妥当であろうということになるのである。

以上のことを念頭に置いた上でテキストを見直してみるならば、まずテキストの冒頭において例の問いかけをした後、hanterという言葉を持ち出して、ブルトンが自らの考えを述べている箇所、次のように書かれているのである。「この考えを受け入れるにあたってそう不当とも思えないやり方で捉えると、私が存在していることの客観的な表われ、多かれ少なかれ確固たる表われとみなしているものは、この世にいる限り、真の領域は私にとっては全く未知のものである活動から移ってきているものにすぎないと私に理解させることになる。il me donne à entendre」(PI p.647)

当然ここにおいてentendreは「理解する」という意味で用いられているのであるが、ここから明らかになってくることは、これが事実だとかこれが真実だとかいう形で一方的に押し付けるのではなくて、とりあえず自分自身にとっての諒解事項をこれを出発点として考えていくと

いうことを表明しているブルトンの姿勢である。次にナジャの物語が始まる前にブルトンはいくつかの挿話を紹介しながら、自らの考えを展開していくのであるが、この中にユゴの逸話がある。「ユゴは、自らの人生の終末を迎える頃、ジュリエット・ドルエと何度となく同じ散策を繰り返し、大邸宅の前を馬車が通過する時しか彼の沈黙を中断させることがなかったのだが、その大邸宅には大小二つの門が通じていて、ジュリエットには大きい門を指し示して、〈乗馬用の門だよ、奥さん〉、そして彼女が小さい門を示しながら、〈歩行者専用の門ですわ、あなた〉と言うのを聞くのである。l'entendre, elle, montrant la petite, répondre:«Porte piétonne, monsieur.»」(PI p.648)

ここにおいてもentendreは明らかに「聞こえる」「聞く」という意味であるが、ここで我々が注目しなければならないのは、ただ単に聞こえたかどうかとどのような内容の発言があったのかというよりも、自然に会話が成立しているというユゴとジュリエットの関係の方なのである。これもナジャの物語の前の挿話の一つであるが、ある劇場でブルトンがピカソと話をしていた時のことである。「一人の若い男が私に近付いてきて、いくつかの言葉をたどたどしく話し、最後には彼は私を戦争で死んだと思っていた彼の友だちのうちの一人と取り違えていたということがわかるようになる。finit par me faire entendre」(PI p.653)

この若い男は後にブルトンとシュルレアリスムの活動を共にすることになるポール・エリュアールだったわけで、この奇妙な出会いということがブルトンの意図したところであるが、初対面であり、どのような外観をしているかとかどのような印象であったかということよりも、まず会話ということが前面に出てきている点が我々には興味深い。これもナジャの物語の前の挿話の一つであるが、ブルトンが興味を持っている『狂女たち』という芝居について触れたところがある。この中でブルトンは『狂女たち』を「唯一の演劇作品」(PI p.669)と表現するのであるが、その後次のような説明を付け加えている。「私はこの意味で使っているj'entends、つまりもっぱら舞台のために作られたということである」(PI p.669)

この場合entendreは「(これこれ)の意味で使う」ということで、これも既に指摘したように、ブルトンにとっての諒解事項を表明したものとして理解することができる。次に、同じこの芝居に関する箇所であるが、芝居の内容に触れていて、ある情景の中に「鐘の音が聞こえたon a entendu la cloche」(PI p.669)というのがある。これについては特に言及する必要はないであろう。これもまたナジャの物語の前の挿話の一つであるが、蚤の市に対する関心を述べているところがあり、どういうものを探すのかという点についてある基準を述べている箇所がある。「私が理解しそして私が好む意味で結局のところ背徳的なpervers enfin au sens où je l'entends et où je l'aime」(PI p.676)

これもブルトンの諒解事項をそれとして示す目的があったということである。次にブルトンがナジャと出会う10月4日の記述の中で、ナジャの次のような発言がある。「あなたが話すのを聞いてÀ vous entendre parler、私は何もあなたがそうすることを妨げることはないだろうと感じていたわ。何も、私でさえ駄目…」(PI p.688)

ここにはブルトンとナジャのごく自然な、敢えて言えば正常な会話が成立しているのを見て取ることができる。10月7日のナジャの話の中で、次のような体験が語られる。ナジャは麻薬

の運び屋のようなことをやっていたのだが、警察に目を付けられて呼び止められるところがある。「それでも、電車から降りる時、私は声のようなものが私にあんたは通れないんだよと言うのが聞こえるの。j'entends comme une voix」(PI p.702)

これについてはある種の会話の始まりというかやりとりを示したものであって、特に言及する必要はないであろう。この後10月4日から12日までの出会いの記述が終了してから、ブルトンはナジャとの関わりについていろいろ考えを巡らせるわけであるが、この中でナジャ自身によって語られる悲惨とも言うべき話がある。これはそれを聞いたブルトンの思いを語る場所である。「私は話を聞いてしまった後で長い間泣いたj'ai pleuré longtemps après l'avoir entendu」(PI p.718)

ここにおいて確かに会話は成立している。だからこそブルトンはその話を聞いて反応したのである。そしてここまでは多少問題はあるとは言え、順当な展開であったと言えるのであるが、我々が注目すべきであるのは次の箇所である。恐らくテキストの中でentendreの理解については最も重要な箇所であると思われる。ブルトンはナジャと毎日のように会うのはやめていたが、だからと言って全く会っていなかったというのでもない状況において、言わばナジャを遠ざけておきたいという思いが強まったと思われる箇所である。10月4日から12日の間の記述においては歴史的現在が使われ、その場の情景が生き生きと描写されていたわけであるが、その後複合過去も使われ、次第次第にナジャとの距離が広まったと思われた、更に次の段階において、大過去によってナジャとの関係が語られることになるのである。つまりナジャは完全にブルトンにとって過去の人なのである。「私はかなりずっと前から、ナジャと理解し合うことをやめていた。実を言うと、恐らく私たちは今まで一度も理解し合ったことがなかったのだ、J'avais, depuis assez longtemps, cessé de m'entendre avec Nadja. À vrai dire, peut-être ne nous sommes-nous jamais entendus少なくとも生活していて事の成り行きを検討する方法においては。」(PI p.735)

この箇所においてはentendreというよりもs'entendreという代名動詞であって、「仲がいい、理解し合う」という意味である。従って「聞こえる」とか「互いの声が聞こえる」という意味ではない。つまりここにおいて問題になってくるのは、会話があるかどうかということではなく、それは当然のこととした上で、お互いが理解し合っているかどうかということなのである。この後ブルトンは愛について言及するわけであるが、その時の表現は次のようなものである。「私の理解している意味での愛のみSeul l'amour au sens où je l'entends」(PI p.735)

これは既に指摘したように、ブルトンの諒解事項を明らかにしたということである。次にナジャが精神病院に入ったという知らせを聞いて、ブルトンが精神科医と患者のやりとりについて言及するところがある。具体的には次のようなものである。「〈あなたはいろいろな声を聞いているVous entendez des voix、それじゃ、それは私のような声ですか。——いいえ、先生。——わかりました。彼には幻聴がある〉」(PI p.736)

精神科医と患者のやりとりであるので、我々が第二部において行なう精神分析的読解と無関係ではないのであるが、現段階においては特に指摘する必要はないであろう。同様に精神科医について言及したところで、次のような箇所がある。「彼らの責任は似たような出来事では多かれ少なかれ負わせられるわけだから、疑いのある場合は彼らは回避する方を選ぶということ

を上手にほのめかしていたのだ。ils laissaient bien entendre」(PI p.739)

ここにおいてはentendreは「理解する」という意味であり、これ以上指摘する必要はないであろう。また同様に次のような言及もある。「そう理解するのが習慣であるという意味でau sens où l'on a coutume de l'entendre、自由意志による収容は最早存在しない。」(PI pp.739-740)

これもentendreは「理解する」ということで問題はない。この後ナジャについての言及が再び始まるわけであるが、この箇所において「よく理解しておこうentendons-nous bien」(PI p.741)が挿入されている箇所がある。前後の文脈については関係がないので省略するが、ここにおいてもentendreは「理解する」ということである。そして次が例の結末部分になるわけである。この後の部分であるが、エピローグにおいてブルトンが本を書くことの問題に言及している時、次のような箇所がある。「私はどのように理解してもらえるのだろうか。Comment pourrais-je me faire entendre?」(PI p.746)

ここにおいてentendreは当然「理解する」ということになる。訳として「私の言うことを聞いてもらえる」も可能であるが、意味合いとしては「理解する」ということである。そして最後にブルトンは理想の女性とも言うべきシュザンヌに対して「君」と呼びかけ、更には哲学的な議論を展開するわけであるが、「それは依然として愛である。」(PI p.752)とか「全てか無かだ。」(PI p.752)という表現を示した上で、次のように書いているのである。「せいぜいこの〈全て〉の本質についてそれを調べようなどと思うくらいだろう、もし、この主題について、情熱であるためにはその性質は私の言うことを聞くことはできない状態であるはずはなかったとしてのことだが。il ne fallait pas qu'elle fût hors d'état de m'entendre」(PI p.752)

いささか難解であるが、entendreに話を限って言うならば、ブルトンにとって自分の言うことを聞いてもらえる状態にあるならば、それは自分の言うことを理解してもらえるはずだという思いがあるように思われる。つまりentendreは「聞こえる」であり「理解する」でもあるのだ。これまでentendreに焦点を絞ってテキストを見直してきたわけであるが、entendreの使用において「聞こえる」という意味合いを持つものもいくつかあったのであるが、ブルトンの使い方としてはむしろ「理解する」あるいは「(これこれの)意味で使う」という例も数多く見られた。つまりブルトンにしてみれば、ある種の諒解事項をここで確認しておくといった意味合いが強いように思われる。自分はこの言葉をこれこれの意味合いで使うからわかっておいてくれというわけである。従ってentendreの過去分詞であるentenduが「諒解された」とか「諒解済みの」という意味を持つことになるのと同じ発想である。

このように考えるならば、ナジャの物語の結末部分も同様に考えることができるだろう。つまり「私はあなたの言っていることが聞こえないし、仮に聞こえたとしても理解することはできない」ということなのである。もちろん「この現実にある全く別の世界」という表現が出てきているわけであるが、ナジャは精神病院に入っているだけで、死んでいるわけではないし、ブルトン自身もそのことを承知しているのであるから、l'au-delàを死後の世界といった意味合いで「彼岸」と捉えることは恐らく間違いであるだろう。マルグリット・ボネも指摘するように³⁾、この世にある別の世界といった意味合いなのである。従ってそこまで離れたところにいるわけであるから、ナジャの言っていることも聞こえるわけではないし、また別世界にいる人の

ことであるから、たとえ話が出来たとしても、理解することはできないということなのである。しかしそれにしても、何故ナジャは不在であるのか。『ナジャ』をブルトンにとっての自己同一性の探求の書と捉えた場合、10月12日以降のものとして記される次の部分、つまり「ここでこの死に物狂いの追求が終わるということがあり得るのか。」(PI p.714)が現われた時点で、実はこの試みは終結していたのである。ブルトンにとってナジャは自己同一性を明らかにする対象ではなかったということである。ところが実際にはこの後もブルトンはナジャの物語を書き続けるわけであり、更にはナジャの物語が終わってしまった後にもエピソードとしての部分を書き続け、『ナジャ』を完成させてしまうわけである。10月12日までのところで『ナジャ』が終わってれば、自己同一性の探求として問題なく捉えることが出来たのである。ところが12日以降の部分が書き加えられることによって、様相は一変してしまったのである。少なくとも我々は『ナジャ』を自己同一性の探求という観点からのみ捉えることはできないのである。そしてまた、何故ナジャは不在とならなければならなかったのか。ここにはナジャが不在でなければならぬブルトンの要請があったことは確かである。別の観点とは何か。我々は第二部でそれを取り上げることになるだろう。

第二部 『ナジャ』を精神分析という観点から読む

第四章 精神分析的読解の試み

自身精神分析医でもあるミシェル・シュネデールによって書かれた『マリリン 最後のカウンセリング』の本文の冒頭には、マリリン・モンローの最後の精神分析医であるラルフ・グリーンソンの遺稿が紹介されている。「物語を全部また始める。マリリンのカウンセリングをもう一度繰り返す。事の成り行きが始まるのはいつも最後からだ。(中略)そして話している誰かがいる。彼自身に。一人ぼっちにならないために。逃亡中の男、私立探偵、医者——あるいは精神分析医、悪くない——が向こう岸から彼の人生を語る。彼を死に至らしめるものについて話しながら、彼は何によって生きたのかを思い起こすのだ。彼の声はこう言っているように思われる。(私の言うことを聞いてくれ、何故なら私はあんたなんだから。)物語を作るのは声であって、声が語っていることではないのだ。私はこの物語を語ろうと試みるだろう。私たちの物語。私の物語。たとえこの結末を削除できたとしても、これは嫌な話になるだろう。」(DS p.13)

何か『ナジャ』と重なるように思えるこの記述は、まさに精神分析医とその患者の関係を如実に物語っている。シュルレアリスムと精神分析の関係は深く、ブルトンとフロイトのやりとりはブルトンの著作である『通底器』にも収められている。またブルトン自身当初は医学を志し、仮インターンとして精神科に配属されたこともあったのである。つまり我々がここにおいて『ナジャ』のテキストを読む際に提示する観点は自己同一性ではなく、まさにこの精神分析の治療というものなのである。

まずブルトンは1963年の全面改訂版に添えた「序言(遅れた至急便)」において、次のように書いているのである。「物語のために採用された語調が医学的、とりわけ神経精神医学的観察記録のそれに似せて作られているということである。」(PI p.645)

神経精神医学上の観察とは全く関係のないものにおいて敢えてその語調を採用することはないだろうというのが、我々の考えとしてはある。そしてそのことを念頭に置いた上で『ナジャ』のテキストを見直してみるならば、そこに存在するものは精神分析で言うところの転移なのである。つまりジャック・ラカンが『精神分析の四基本概念』の中において転移について触れながら、自らの定義として「人間の欲望、それは〈他者〉の欲望である」を紹介し、それが「君の欲望、それは〈他者〉の欲望だ」と具体的に変化していくことを示している。そして『ナジャ』においては、ナジャの欲望はブルトンの欲望であり、ブルトンの欲望はナジャの欲望であると読み換えることができるだろう。

実際具体的にテキストに則して見ていくなら、次のようになっている。10月4日の初めての出会いから、ナジャはブルトンに対して「私はちょうどまい具合に、ついさっきそれがわかり始めていたところです。」(PI p.688)と理解を示すし、ブルトンの著作を一、二冊読もうとするのである。

また10月5日の出会いにおいて、ナジャが言葉遊びをしていると、それに対してブルトンは「人はここでシュルレアリスムの熱望の極限、その最強の限界理念（下線原文）に触れるのではないか。」(PI p.690)とまで評するのである。

そして10月6日の出会いにおいて、ナジャはブルトンに対して次のように言うのである。「彼女は今私に私の彼女に対する影響力、彼女に私が望んでいること、恐らくは望んでいると思っている以上のことを考えさせ実行させる私の持っている能力について話している。彼女は、そのことを通して、彼女の不利になることは何も企てないよう私に懇願している。彼女は、私と知り合うかなり前から、私に対して一度も秘密を持ったことがなかったように彼女には思われる。」(PI p.693)

ここにおいてナジャの欲望はブルトンの欲望となっているが、ナジャとしてはブルトンの欲望がナジャの欲望となつてほしいと思っているわけである。そしてその一つの現われとして、二人がドーフィヌヌ広場近くを歩いている時に、奇妙な光景に遭遇し、「恐怖がナジャをも襲い始めたように、ここにおいて恐怖が私を襲っていることを私は認める。」(PI p.695)ということになるのである。ここにおいてブルトンとナジャは恐怖で繋がっていると言うこともできるが、どこまでが自分の感じた恐怖であるのか明確ではないだろう。こうなってくると「私」の領域も実に曖昧なものである。10月7日の記述において、次のような箇所がある。「私は彼女のそばにいながら、彼女のそばにある物により近いのだ。彼女の今の状態だと、どのみち、突然私を必要とすることに当然なるだろう。」(PI p.701)

つまりナジャの欲望がブルトンの欲望となるのであれば、ブルトンはナジャを通してナジャのものを欲するようになるのである。逆にブルトンの欲望がナジャの欲望となるのであれば、いずれはナジャの欲望の対象がブルトン自身となることも理解されるわけである。そしてこのようなほぼ毎日の出会いが続いた後、ブルトンはナジャと距離を置くようになるが、その過程においてブルトンとナジャがお互いにどう思っていたのかを思い返している箇所がある。つまり「私は最初から最後の日まで、ナジャを自由な天才、あるいはいくつかの魔法の行使が一時的に引き付けることは可能だが、降伏することは問題になり得ないであろうものすごい風の精のよ

うなものとなし。彼女はというと、その言葉の十全の意味において私を神とみなしたり、私が太陽であった(下線原文)と思ったりすることがあったということを私は知っている。」(PI p.714)

確かにブルトンはナジャの言葉遊びに触れて、そこにシュルレアリスム精神の具現化を見るわけであるし、ナジャはブルトンを必要としていたことも事実なのである。ジャック・ラカンは『エクリ』において、「現代では精神分析医が神に取って代わったと言わしめているものについて考えよう。」(EC p.744)と指摘しているように、ナジャにとってブルトンはまさにそのような立場にあったわけである。

このように考えるならば、ブルトンとナジャの関係はまさに精神分析医と患者の関係として捉え得ると言えるだろう。そしてそのような関係にあったと考えられる二人の関わりが終わってしまったということは、どう理解すればいいのだろうか。特にナジャの物語の結末部分において、ブルトンがナジャに対して「私はあなたの言うことが聞こえない」「私はあなたの言うことが理解できない」と発言したことをどのように捉えるかという問題がある。我々はこちらにおいて精神分析が、話すことによって成立するということに改めて気付くわけである。つまり精神分析とは、ある一定の限られた時間において、患者たる主体が話すことによって始まり、そして終わる過程を指しているのである。この時間については、ラカンが短時間セッションの必要性を主張していたこともあり、ある限られた範囲内ということになってしまうことから、精神分析を終了させるのは、精神分析医の判断に委ねられると言えるだろう。このように考えるならば、ブルトンがナジャと距離を置こうとした時に次のように考えていることも理解できるのである。つまり「別れが結局不可能だったかどうかは、私次第でしかなかったのである。」(PI p.718)

それでは何故ブルトンは精神分析として捉えられるナジャとの関係を断ち切ったのか。あるいは逆に言うなら、何故ブルトンはあたかも精神分析として捉え得るような関係をナジャとの間に成立させたのかということも問題となるわけである。我々はこちらにおいて、精神分析を成立させているものが患者=主体の伝える話であり、更に厳密に言うなら、そこで話をまさに可能にしている声であるということに注目しなければならないのである。この声とは、ラカンの言う対象aの代表格の一つとして挙げられているものである。

第五章 声を持つ現前ということ

精神分析がそれとして成立するのは、患者=主体が精神分析医に対してのみ自らの声でもって話すということに意味がある。デリダが『声と現象』において指摘しているように、「言語は現前と不在のこの戯れのまさに媒体なのである。」(VP p.9)から、声こそは話す主体の意識の現前を明らかにしているわけである。

もちろんただ単に声を発すればいい、何か話をすればいいというわけではなく、その際の前提、もしくは付随した条件として、どのような意図でもってその話をするかということが重要なのである。平たく言えば、わかってもらいたいという気持ちがなければ、何を話しても相手には伝わらないということである。この点についてはデリダも指摘しているが、フッサールの

『論理学研究』において次のように書かれている。「しかしこの意志の疎通は、聞き手もその時話している人の意図を理解している場合にしか、可能とはならない。そして単なる音声を発するのではなくて彼に話しかけ（下線原文）、従ってその音声でもって意味を与えるあるいくつかの行為、明らかにしたいと思っているか、その意味を伝えたいと思っている行為を同時に成し遂げる人物のように話す人を把握する限りにおいて聞き手は理解するのである。何よりもまず、精神的な交流を可能にし、このような関係を持たせる言説である談話を作るものは、意志を通じ合う人物たちに対応する身体的かつ心理的体験の中にあつて——言説の身体的側面によって媒介された——この相関関係に存在するのである。」（VP p.41）

例えば私が何らかの体験をした場合、その体験は私にとって現前したものであるが、その私が他の人にその体験を語る時、その体験は他の人にとっては現前していない。現前しているのはまさに私の声であつて、他の人は私の声を通してその体験を間接的に理解する他はないのである。つまりデリダは次のようにフッサールの考えを説明する。「それというのも私が他者の言うことを聞く時、彼の体験はもともと私にとって〈直に〉存在しているわけではない。私はフッサールが考えるように、生まれながらに直感というもの、つまり世界において提示されているもの、身体や、身振りや、発している音声を聞かれるがままになるものの媒介なしの知覚というものを持っている。しかし彼の経験の主観的側面、彼の意識、特に彼が自らの記号に意味を与える行為は、それらが彼にとってそうであるように、そして私のが私にとってそうであるようには、私にとって直接そしてもともと存在しているわけではないのである。」（VP pp.41-42）

以上のような考えに基づき、我々は『ナジャ』のテキストにおいてどのように声が発せられ、会話が成立しているかについて見ていくことにしよう。まずブルトンはナジャの物語を始める前に、いくつかの挿話を語るわけであるが、それに際してブルトンは次のように書いている。「私はこれから取りかかろうと思っている物語の他に、身体の面以外で私が理解できるような（下線原文）私の人生の最も重要な挿話しか詳しく語るつもりはないのだ。」（PI p.651）

この後ブルトンはそれらの挿話についてどのような性質を持った事実であるのかを説明するわけであるが、このような語りのあり方は『ナジャ』を通して見られるブルトンの基本的方法である。挿話として書かれている様々な事実はブルトンにとっては現前していたものであるが、我々にとってはそうではない。例えば現在ではマルグリット・ボネの研究によって明らかとなっていることであるが、ナジャは実在の人物であり、『ナジャ』に書かれていることは事実なのであるが、以前には逆の見方もされてきて、これは当然の如く我々にとっては全ては現前していなかったからである。従って我々がこの『ナジャ』のテキストを前にして声の現前を問題にする時、我々にとっての現前ではなく、ブルトンとナジャとの間に見られる現前に注目しなければならない。従ってブルトンが挿話を語り始める前に、「私は前もって決められた順序などなく、思いつくものを思いつくがままに任せるその時々気紛れに従ってそれについて話すことにしよう。」（PI p.653）と書いているにしても、つまりそこには自然さが感じられ、あたかもブルトン自身語り出してくるような印象さえあるのであるが、これも現前とは考えられないということである。

これは内容的に信じられるかどうかという次元の問題ではない。そもそもブルトンが興味を

持った事実であるから、奇妙で不可思議なものであって、その意味ではありそうもない話なのであるが、そういうことが問題なのではない。従ってブルトンが次のように書く時、つまり「ここかしこで、間違いや些細な言い落とし、更には何らかの取り違えや正真正銘の失念とか私の語っていること、全体的に信用の置けないものではあり得ないことに影を投げかけるのは問題ではない。」(PI p.653)と書く時、ブルトンが『ナジャ』を事実として我々に提示しているにしても、我々はそれが事実かどうかを検証する必要はないし、少なくとも今は問題ではないのである。

さて『ナジャ』のテキストを検証してみるならば、まず10月4日の最初の出会いにおいて、ブルトンは軽くナジャを観察しながらも、最初の関わりとしてはまず言葉*la parole*なのである。つまり「ためらいなく私は見知らぬ女性に言葉をかけるのだが*j'adresse la parole à l'inconnue*、もっとも私は白状するが、最悪の事態を覚悟している。」(PI p.685)

ここからブルトンとナジャの会話が始まるわけであるが、そこには既に信頼さえ生まれているのだ。「私に更に聞くこともなく、裏切られるかもしれない(それともこれでいいのかもしれない)信頼感でもって彼女が私にする告白の始まり*le début de confession*が提起するのも謎である。」(PI p.685)

相性の問題もあるのかもしれないが、出会って間もなくナジャは身の上話をするに至っているのだ。まさに精神分析医と患者の会話を連想させるものである。これはこの後も同様であって、ナジャは自分の名前を言った後、次のように話を続ける。「彼女は(これらの言葉の非常に限定された意味で)私が誰であるかを私に聞こうと考えていたばかりだった。私は彼女にそれを言う。次いで彼女はまた自分の過去に再び戻り、私に自分の父親や母親のことを話す。」(PI p.686)

つまりブルトンとナジャの関係の基本は、精神分析のセッションのようなものであると考えていいだろう。もちろん本人たちがそれを意識していたかどうかは明確ではないが、医学を学んでいたブルトンにしてみれば、それなりの反映をそこに見ることは可能であるかもしれない。10月5日になると、言わば二度目のセッションということになるが、最初はそれ程順調ではない。「会話はしかしながらより困難になったし、まずは彼女としてはためらいなしではいかないことになる。」(PI p.689)

この後ブルトンの著作やナジャのかつての男友達のことが話題になるのであるが、この時点において「次に彼女は急に親しい口のきき方をする。」(PI p.690)

そしてその後言葉遊びを提案するのであるが、それについてナジャは次のように説明するのである。「ええっとね、私、一人にいる時自分に話しかけるし、あらゆる種類の話をも自分に語ってきかせるけど、こんな風なの。それに下らない話だけじゃないわ。私が生きているのは、まさに完全にこういう風になの。」(PI p.690)

これに対してブルトンはナジャに語りかける形ではなく、テキストにおいて注の形で、「人はここでシュルレアリスムの熱望の極限、その最強の限界理念(下線原文)に触れるのではないか。」(PI p.690)と評価するわけである。

ブルトンがここにおいて最もシュルレアリスム的であると認めたのは、言葉の現前という問

題が明確に示されているからである。つまり言葉の現前ということに関して言うなら、相手が何かをしゃべった時に、我々としてはそれが相手の意識の表われと見るわけである。極端な場合には、魂の叫びといったようなものであるかもしれない。しかし実際にそこで相手が話していることは、本当に意識の表われなのだろうかということがある。つまり嘘をつくということも可能であって、まさに声は現前しているけれども、相手の意識はそこには見当たらないということにもなるわけである。この点について、デリダは『声と現象』において次のように説明する。「言語の魂はそれ自身から、その自らへの現前から切り離されていないように思われる。」(VP p.87)

つまり「話し言葉は生きていると常に言わしめたもの、こうした全ては従って話す主体は現在形で自分の声が聞こえるということを前提としているのである。以上が話し言葉の本質あるいは常態である。」(VP p.87)。

とは言いつつも、そこに嘘が介在していないと言うことはできない。それは単なる言い間違いとかで、思っていることとは別のことを言ってしまったというようなことではない。むしろ意識的な嘘の介在というわけで、ここにおいて意識の現前ということも崩れてくるのである。そこで、次のようなことが考えられるわけである。「〈自分が話すのを聞く〉という作用は、絶対的に独自の型の自己執着である。(中略) 他方、主体は自分の声を聞いたり自分に話しかけたり、外在性の、世界の、あるいは一般に自分自身のものではない審級によって、いかなる婉曲な言い回しをすることなく自ら生み出すシニフィアンによって影響を及ぼされるがままになることがある。(中略) 従って、声の現象学的力を説明するためには、この自己執着の概念を更にはっきりとさせ、その中においてそれを普遍的にしているものを説明しなければならない。純粋な自己執着として、自分が話すのを聞くという作用は自分自身の身体の内面における表面にまで至るように思われるし、それは、その現象において、内在性におけるこの外在性、自分自身の身体についての我々の経験や心像が広げられるこの内部の空間なしでも済ませられるように思われる。そういうわけでそれは一般に空間の絶対的簡略化に他ならないであろう自己への近接において、絶対的に純粋な自己執着として体験されるのである。(中略) というのもまさに声は純粋な自己執着として (下線原文) 生じる限りにおいて、世界の中に音を発するに際していかなる障害にも出会うことはないからである。(中略) しかしこの自己執着がなければ、いかなる世界もそれとして (下線原文) 現われることはないだろう。」(VP pp.88-89)

つまり自分が話すのを聞くという行為において、現前は確実に保証されるのである。仮にそこで嘘をついているとしても、自らはそれが嘘であることを知っているわけで、意識の現前ということについても疑いを持つこともなく揺るぎないものとなるのである。このように考えるならば、ナジャの言葉遊びについて、ブルトンが最もシュルレアリスム的であると評したことから、ブルトンにとっての価値はまさにこの現前にあるのではないかと推察されるのである。このことを念頭に置きながら以下のテキストを見ていくことにしよう。10月6日、ナジャは声に支配されているように見える。まずドーフィーヌ広場の近くでブルトンとナジャがともに恐怖にとらわれていた時、ナジャはかつての経験を語るのだ。「こんな風に言っている声もあったの。おまえは死ぬんだ、おまえは死ぬんだ。」(PI p.697)

彼女の心をなだめようとしてブルトンは気をつかうのであるが、「彼女を私に引き戻すために、私は彼女にボードレールの詩を口にするが、私の声の抑揚が彼女に新しい突然の恐怖を引き起こす。」(PI p.697)

まさに声が現前しているのがわかるだろう。この後ブルトンとナジャはチュイルリー公園に向かうのであるが、彼女が子供たちに人気で子供たちが寄ってくるような時のことである。「彼女は今彼女一人に向かっているように話しているが、彼女の言っていることはどれも最早同様に私の興味を引きはしないし、彼女は私とは逆の方向を向いていて、私はうんざりし始める。しかし、私は苛立ちを隠さなかったわけでもなかったのだが。〈これ以上言うことはないわ。私はあんたを悲しませようとしているのを今さっき感じたわ。(私の方に振り向きながら)もうやめたわ〉」(PI p.698)

つまり相手が現前し、声も現前していても、こちらに向かって話そうという気持ちがなければ、その現前も充分ではないということである。そして今度はブルトンの側としてはどうなのかについてわかるのが、10月7日の記述なのである。「私は彼女を観察しすぎているように思われる、他にどうしたらいいのだ。」(PI p.701)

つまり明らかにブルトンは精神分析医の立場に立っていることがわかるだろう。「もし私が彼女に会わないとしたら、今日の午後はどうしよう。そしてもし最早彼女に会わなかったとしたら。私はもうわから(下線原文)ないだろう。私はだからもうわからないというのが当然だったのだろう。」(PI p.701)

要するにブルトンにしてみれば、精神分析医と同様に、ナジャに会って話を聞く、それだけなのである。このような状態が順当に続くのであれば、精神分析としては成功という結果になるのかもしれない。ところがブルトンはナジャの話に付いていけなくなるのである。10月5日の言葉の遊びについてブルトンは最もシュルレアリスム的という評価をしたにも拘らず、10月11日の記述においては次のような箇所がある。「彼女がいくつかのレストランの出入口のところで献立表を読んだり、あるいくつかの料理の名前を巧みに操っているのを見るのはいらいらする。私はうんざりする。」(PI p.710)

そしてこの傾向は10月12日においてはより顕著になって、とうとうブルトンは次のように言うのだ。「私は彼女の独り言についていくのがだんだん大変になる。そのため長い沈黙が私を無口にさせ始める。」(PI p.713)

ここに至って、ブルトンの精神分析の治療というものは失敗であったのだと結論付けたいくなる。そしてこの日をもって、ブルトンがほぼ毎日のようにナジャと出会っていた日記形式の記録は終わりを迎えるのである。つまりこれで、精神分析の治療も御仕舞いということである。逆に言うなら、10月4日を初日として毎日書かれた記録が、日記形式であり、それが12日で終わりになっていることの意味が理解されるだろう。そして10月12日以降の記述において、ブルトンはナジャに対してどれだけのことができたかについて反省の言葉を述べるようになるのであるが、それは次のようなものである。「しかし何日かは彼女は私の言葉に注意を少しも向けることもなく、私にどうでもいいことについて話していたり黙っている時には、私の嫌なことに少しも気を付けることさえなく、私の存在のみで生きているように見えていたので、彼女が

この種の厄介事を普通に解決するのを助けるために彼女に対して持ち得る影響力を私はかなり疑っている。」(PI pp.718-719)

ここに至って、ブルトンはナジャとの間に何が起こったのかという様々な事実を数え上げてみても何の意味もないだろうと結論付ける。結果的にブルトンはナジャを救うことが出来なかったのだから、今更何を言っても何にもならないという判断だろう。少なくとも12日以降においてもブルトンはナジャと何度か会っているのであるが、最早何の解決ももたらさないということから、敢えて書く必要もなかったということなのだろう。このように考えるならば、結局のところ何も残らなかったのかと言うとそうではなく、ブルトンは次のように書くのである。「私は日々の推移の中で、彼女によって私の前で発せられたり私の目の前で一気に書かれないくつかの文、私が彼女の声の調子を最もよく見出すものであり、その響きが私の中であって非常に大きいままである文しか最早思い出したいくないのだ。」(PI p.719)

つまりナジャと会わなくなってしまうとしても、声だけがまだ残っているという状態である。声とはまさに彼女の意識の表われなのである。そしてこの後にブルトンは、既に指摘したように、ナジャとは今まで一度だって理解し合ったことなどなかったという大過去による記述があるのだ。ナジャの物語が終了した後エピローグの部分において、ナジャの物語とエピローグの部分隔着るものが予想以上に大きいものであることを指摘した上で、それを持ちこたえることができたのは希望があったからだと説明するのであるが、そこには声が大きく関与していることを明らかにするのだ。「そういうわけで試練を経ている声は更に人間的にわき上がり得るように私には思われるし、だからこそ私がそこに注いだいくつかのめったにない声の響きを捨てることはないのである。ナジャ、ナジャという人物は非常に遠くにいるけれども。(中略)そして不可思議、この本の最初から最後の頁まで私の信頼が少なくとも変わることがなかった不可思議によってもたらされ、そしてまあこういうものだろうが、既に取り戻され、最早彼女のものではない一つの名前が私の耳で鳴り響いているけれども。」(PI p.746)

我々はある人物の現前と言う時、その人物を視覚的に捉えることによって可能になると思う。確かに10月4日の出会いにおいて、ブルトンはナジャを見た、もしくはナジャがブルトンを見たということが問題になっている。ところがその人との関わりにおいてその人の現前を明らかにするものは、最早視覚的なものではなくて声なのである。デリダは『声と現象』において、フッサールの現象学に言及しながら、「意識の特権は(中略)肉声での可能性でしかない」(VP p.14)と明らかにしている。我々は相手がただ単に存在するだけではなく、何か言葉を発してくれることを望む時、その声を通してその人の意識に触れたいと思うのである。このように考えるならば、ナジャの物語の結末部分において語られるJe ne vous entends pas.は、ナジャとは最早会っていないという事態を受けて、最早ナジャの声を聞くこともできないという意味に理解することができる。

ここにおいて注目すべきなのは、近くにナジャがいるかもしれない、確かめる必要があるとしているにも拘らず、そこで行なわれる確認というのは視覚的なものではなくて聴覚的なものであるという点なのである。つまり問題なのは声であって、それはまさに意識の現前が認められるからなのだ。しかしここまで考察を加えてきて奇妙だと思われるのは、『ナジャ』のテキ

ストがここで終わっていないということなのである。確かにブルトンはナジャの物語が終わった後のエピローグの部分において、本として一冊にまとめることのためらいと苦悩を口にしていくし、1963年の全面改訂版で付け加えられた「序言」において問題になっているのは、本を書くという行為についてなのである。つまり我々が精神分析という観点から考察を行ない、テキストの冒頭とナジャの物語の結末部分の間に介在すると思われるずれについてとりあえずの解決を見たとしても、まだ『ナジャ』のテキストにはエピローグが書かれているわけであり、それが新たな問題を生み出すことになるのである。それは仮に第一部で考察したように、自己同一性という観点をういたとしても同様であって、我々はここにおいて再び『ナジャ』のテキストに向き合わなければならないのである。

第六章 不在からもたらされるエクリチュール

現在我々が『ナジャ』のテキストとして捉えているものは1963年の全面改訂版で、初版は1928年に刊行されている。それではこの初版において『ナジャ』が公表されていたのかというと、全体のテキストとしてはそうなのであるが、部分的なものとしてはそれ以前に読者の目に触れる形になっている。『ナジャ』の第一部もしくはプロローグの部分については、『ナジャ/第一部』という題で1927年の秋に『コメルス』に掲載されているし、日記形式で10月4日から12日まで書かれているもののうち10月6日分が『ナジャ（断片）』という題で1928年の『シュルレアリスム革命』の11号に掲載されている。この10月6日の記述においては、現在『失われた足跡』に収録されている「新精神」について言及されていて、これはまさに『ナジャ』の出現を予告させるような内容で、発表されたのは『文学』新シリーズの第1号で1922年3月となっている。このような雑誌掲載の内容を見ていくと、ブルトンが書きたかったこと、公表したかったことというのは、シュルレアリスム的と形容し得るような不可思議な出来事についてであって、発表の媒体としてはまさにこの雑誌の中に掲載されるようなものが適当であったらと思う。本の形式にするならば、短編小説といった趣きが合っているかもしれない。このような状況において『ナジャ』のテキストが書かれ公表されたわけであるから、当然刊行前からある種の期待があったと言うべきだろう。この点についてマルグリット・ボネは、「そういうわけで優れた読者の注意は刊行前にその本に引き付けられていたのである。」(PI p.1495)と書いているくらいである。そのためブルトンとしては単なる挿話集に終わらせるのではなく、一冊の本として提示しなければならないという思いも強くあったと思われる。このあたりの事情があるために、ブルトンは『ナジャ』の第三部であるエピローグの部分を次のように書き始めることになったわけだろう。つまり「本のようなものを準備する時間があって、最後まで来た時にそのものの運命やいずれにせよそのものもたらす運命に興味を持つずべを見つける人は誰でも（これは一つの言い方だが）私はうらやましく思う。途中で少なくとも一度はそれを放棄する本当のきっかけが彼にあったということを私に信じさせてくれますように。彼は更に先に進んだだろうし、彼が我々にその理由を御教示下さることを期待することだってできるだろう。」(PI p.744)

具体的に見ていくならば、ヴァランジュヴィル-シュル・メール近くのアンゴの館に滞在し

て『ナジャ』の第一部と第二部を書いたのが1927年の8月である。この後先に触れたように、秋には第一部を『コメルス』に発表している。ブルトンが『ナジャ』の第三部を書いたのが1927年の12月中頃とされていて、ブルトン自身エピローグの部分においてこの期間のことに言及しているが、気分的には大変だっただろうと思われる。それでもというか逆に当然のこととして捉えるべきか、ブルトンがこの第三部を書くことで『ナジャ』を完成させた背景には、シュザンヌ・ミュザールの存在があることは疑いない。ブルトンが『ナジャ』の第一部、第二部を書き終え、秋に一部雑誌に掲載される間にブルトンを翻弄し続けたリーズ・メイエとブルトンは別れていて、このあたりは女性関係のことについてはかなり重い時期であったと思われる。ところがこの雑誌掲載の後ブルトンは12月にブルトンにとってはある時期においてまさに理想の女性とも言うべきシュザンヌにパリのカフェで出会っていて、その後シュザンヌとは一緒に南フランスに出かけるなど順調な関係を持つに至っている。もっとも12月の半ばには、ブルトンとシュザンヌはパリに戻り、シュザンヌはもともと愛人であったエマニュエル・ベルルとよりを戻す形になっている。このような状況であるにも拘らず、ブルトンは依然としてシュザンヌの愛を信じ続けていて、ちょうどこのような時期に『ナジャ』の第三部が書かれたというわけなのである。第一部で言及したように、『ナジャ』を自己同一性といった観点から読んでいくことも全般的な外れというわけではなく、部分的に辻褃の合わないところに目をつぶれば、むしろ『ナジャ』のテキスト全体を貫く主題としても成立し得ると考えられる。ただしその場合、テキストの題名は『ナジャ/シュザンヌ』とすべきであって、つまりブルトンにとって自己同一性を可能にする誰かとはまさにシュザンヌなのである。『ナジャ』のテキスト全体としては一応その流れは出来ていて、ナジャの物語の中においてブルトンはナジャのことを愛してはいないし、結局のところ別れてしまったのだが、エピローグの部分においては「君」という風と呼ばれる女性がいることがわかる。テキストにおいては明記されていないが、それはシュザンヌという女性であって、ブルトンにとってはまさに理想の女性として描かれているのだ。つまり「君は実際存在しているわけだし、君だけは存在する（下線原文）ことができるのだから、この本が存在することは恐らくあまり必要ではなかったかもしれない。私が君と知り合う前にこの本に与えようと思っていて、君が私の人生の中に突然現われて私の目には無駄にはならなかった結論をなかつたことにして、別な風に決めることもできると思った。この結論は君を通してしかその真の意味とその全ての力さえ持たないものである。」(PI p.752)

このように書いている時点においては、ブルトンはシュザンヌとの関係が依然としてうまくいっていると信じていたのだ。そんな中で、つまり1928年の5月25日に、この『ナジャ』の初版が刊行される。その後シュザンヌがブルトンに離婚するように求めたり、シュザンヌがベルルと結婚したり、更にはブルトンとシュザンヌの決定的な破局があったりと、様々な展開が生じていくわけであるが、それにも拘らず、1963年の全面改訂版において、この「君」という呼びかけで語られているシュザンヌの部分が、全面的に削除されたということにはなっていない。

この1928年版と1963年版の違いについては、例えばクロード・マルタンの『『ナジャ』とよりよく語る』という研究がある。もともと雑誌掲載分と1928年版との間にも違いはあるのだが、これは当然急いで書いていたために不正確な部分があったり、本として体裁を整えるた

めに修正したということがあったようだ。また1928年版と1963年版の違いについては、300箇所以上の訂正があるということだ。そしてまたマルグリット・ボネによると、「この正確な研究は、ブルトンの思索の動きの中で多数のこれらの手直しを位置付けているようには我々には思えない。」(PI p.1496)というわけで、あまり考察する必要はないようである。ただしマルグリット・ボネの指摘によると⁴⁾、重大でかつ問題となる修正が一箇所あって、それはブルトンがナジャとともにパリを離れて出かけたサン-ジェルマンでの10月13日の夜の出来事だということになる。もっともこの点についても、我々のこの論考においては、とりたてて深く論じる問題でもないように思われる。

むしろ我々がここで指摘しておく必要があると思われるのは、『ナジャ』のテキストにおいて問題となっているのはナジャであって、シュザンヌではないということなのである。日記形式で10月4日から12日までが中心部分として書かれているため、それ以降は会っていないかのような印象を与えるが、この『ナジャ』のテキストにおいても、「私は何度もナジャと会った。」(PI p.718)と書いているのである。

もっとも実情としてブルトンはナジャと距離を置こうとしていたわけで、それに対してナジャは何かブルトンと繋がってしようとしていて、例えば『ナジャ』のテキストの中にも「1926年11月18日付けのデッサン」(PI p.721)が出てくるのである。またこれは『ナジャ』のテキストの中には出てこないのであるが、ナジャはブルトンにしばしば手紙を出しているのである。マルグリット・ボネによると⁵⁾、1926年の10月22日から1927年の2月の半ばまでの間に、27通の手紙が速達郵便があったということである。また『ナジャ』のテキストにはナジャによって描かれたデッサンも挿入されているが、ナジャがこのデッサンを始めるのもこの時期だったようである。彼女は次第に絶望感にとらわれるようになって、1月30日の手紙ではブルトンに「もしあなたが私を見捨てるなら、私は気が狂ってしまうと思います。」(PI p.1512)と書いているのである。

ナジャの状況について言及しておく、1927年3月21日に恐怖のため助けを求めるということがあった。3月24日にはベレ・ヴォクリューズの病院に送られ、14か月後の1928年5月14日には彼女の両親の住む地域への移送が行なわれた。そしてナジャは1941年の1月15日に自らの死を迎えるまで、この精神科の病院にいることになるのである。『ナジャ』の初版が刊行されたのが1928年5月25日であるから、その時には既にパリも離れていたということになる。

とは言え我々がここで注目しなければならないのは、たとえ10月4日から12日もしくはサン-ジェルマンに滞在していた13日も含めて10日間の間にほぼ毎日会っていたという状況から一変して、その後は手紙が書かれるようになったという事実である。つまり相手が現前している状態で投げかけられたパロールから、相手の不在によって生じたエクリチュールへの変換である。ナジャにとって手紙は書かれなければならなかったのだ。

それではブルトンに関してはどうなのか。ナジャは重い精神病を患っていて、当時においては直すことはできなかったようだ。これに対して、医学を志し、仮インターンとして精神科に配属されたことのあるブルトンが、どう対応したかということである。マルグリット・ボネは次のような問いかけをしている。「1916年から1918年にかけて行なった研究や直接の観察によっ

て、精神病というものを知っていたブルトンが、ナジャと出会ってから、彼女の中に精神病の前兆を見て取ることはなかったのか」(PI p.1514)ということである。これに対して、「この無知は驚くべきものである」(PI p.1514)と断定している。もっとも精神医学の勉強をしたとしても短い間だったし、それも時とともに忘れていくのだとか、ジャック・ヴァシェの例に見られるように、戦争という例外的な状況において男性だけ見ていればいいのだと考えていたとかいった意見も出てくるわけである。「しかしまた、振る舞いがその最も極限に至るまで生きられたシュルレアリスムの理念を表現しているナジャによって与えられた魅惑、彼女の発言の詩的な質の良さ、彼女がもたらす常に予知できない気分転換、彼女の周りで作り上げられる偶然と結合の網の目、これらが最初の段階において既に彼女が極限を越えてしまっていたということを理解するのを妨げていたのだと考えるに至るのである。」(PI p.1514)

つまりブルトンは無罪放免というわけである。しかしブルトン自身にとってはそうではなかったようで、この点については『ナジャ』の続編とも言うべき『通底器』において明らかにされていると考えることができる。ブルトンはこの『通底器』において自らの夢の分析を行なっていて、その中の一つに1931年8月26日の夢がある。時期的に見れば、この時既にナジャは精神科の病院に入っていて、地理的にもパリを離れて、ブルトンとはまさに距離を置いたところにいたわけである。その夢の中で、ナジャと思われる気の狂った老婆が出てくるのであるが、この分析の中で次のように書いているのである。「それはナジャである、私は少し前彼女の物語を出版していて、彼女は私と知り合った時、シェロワ通りに住んでいて、そこに夢の道筋がうまく繋がっているように思われる。彼女が非常に年を取っていたのは、夢の前日、私と一緒にカステラヌに一人でいたジョルジュ・サドゥールに、今から数か月前に、サン・タンヌを私が最後に訪れた時に、早発性痴呆症患者が私に生じさせていた年を取らないという奇妙な印象を知らせたからだけにすぎない。私がこの評価に専心するかしないうちに、私はある心配を感じていたのである。つまりそんなことがどのようにして可能なのだろうか、それはまさに正しいのか、さもなければ何故私はそんなことを言うのか。(精神的に健康であろうとなかろうと、彼女に関する私の本を読んで気を悪くしたかもしれないナジャが戻ってくる可能性に対する防御 (下線原文)、彼女の精神錯乱を入念に作り上げたこと、それ故に彼女が収容されたことにおいて私が取り得た過失責任、Xが立腹の時には、今度は自分を狂人にしようとしていると私を非難して、しばしば私の目の前に突き付けた責任に対する防御 (下線原文))」(PII p.122)

実際に責任があるかどうかは別にして、ブルトンにしてみればナジャが精神的に問題を生じたこと、その結果精神病院に入ることになった件については、何かしら後ろめたい思いを持っていたことは事実である。ナジャの求めにも拘らず、ブルトンはナジャを見捨ててしまったことは事実なのである。従ってそのためにこそブルトンはナジャを素材として小説を書いたのではなく、精神分析の治療の記録を書く必要があったのである。だからこそブルトンは1963年の全面改訂版の「序言」において、次のように書くのである。「医学的、とりわけ神経精神医学的観察記録は、文体に関して言えば飾り気を排することを気にもかけず、診察や質問が明らかにし得る全ての痕跡を留めることを目標としている。その過程において、〈ありのままにとられた〉資料を全く損なわないように気を配るこの決意は、ナジャという人物と同様に私自身と

第三者に適用されることが見て取れるだろう。」(PI pp.645-646)

実際テキストにおいて詩的であったり、更にはもっと広く文学的ではないかと思われる箇所もあるが、そのようなことはここでは問題にはならない。ブルトンがテキストを書く上においてそのように心掛けたか、あるいは少なくともそのことを意識していたということで充分なのである。このように『ナジャ』のテキストを精神分析の治療の記録として捉えることが理解できたとしても、それならば『ナジャ』の第一部と第二部だけで充分だったはずであり、敢えてエピローグである第三部が書かれる必要などなかったと言わなければならない。

そこで我々はナジャの物語の結末部分に再び戻らなければならないのである。ここにおいてナジャに対して呼びかけながらも、ナジャからの応答はないとわかってブルトンは呼びかけているのである。つまりブルトンはここにおいてナジャの不在を諒解しているし、ナジャの不在を明らかにしておきたいのだ。

ここにおいてナジャの不在が明らかとなるため、従来の読みにおいてはナジャというのとはとも存在せず、ブルトンによって作られた虚構の人物なのではないかという指摘がなされてきた。これに対しては、マルグリット・ボネの研究から、ナジャは実在する人物であるということが明らかとなっている。

しかし何故ここにおいて、ブルトンはナジャの不在を明らかにしなければならなかったのか。それは、ナジャが今も尚現前しているならば、そこにおいてはパロールで充分だったからである。このことは、エピローグの部分において「君」と呼びかけられる女性、具体的にはシュザンヌであるが、このような女性がいて、仮に『ナジャ』を自己同一性の探求の書として捉えるならば、ブルトンにとって必要なのはナジャではなくてシュザンヌであるという物語を提示することによって完結することもできたはずなのである。しかし実際にはエピローグにおいて、シュザンヌは物語の進行に関与するわけではなく、ただひたすら「君」と呼びかけられるだけなのである。

実際ブルトンはエピローグの部分において、「君」に次のように語りかけているのだ。「私は君のことをほとんど知らなかったけれども、最早覚えているということもあり得ないが、偶然のように、この本の始まりを知って、私がこの本を〈扉のように開け放たれている〉ことを望んでいたこと、そしてこの扉から恐らくいつか君しか入ってくるのを見ないだろうということ、を恐らく私に思い起こさせるために、あんなにも都合よく、あんなにも情熱的に、そしてあんなにも効果的に私に対して介入した君、その君(下線原文)に語りたいという欲望に私が従ったのもこの話なのだ。君しか出入りしないということだ。」(PI p.751)

つまりブルトンにとって「君」に語りかけるだけで充分であって、「君」について本を書くことなど必要なかったのだ。つまり「君」にとって必要なのはパロールであって、エクリチュールではなかったのだ。これは10月6日の記述の中にも出てくるし、『ナジャ』を予告する形で存在する『失われた足跡』の中の「新精神」についても言えることである。

つまり1922年の1月16日月曜日のことであるが、5時10分にアラゴンがボナパルト通りで一人の若い女性を見かける。この女性に興味を持ったアラゴンは、すぐ後にカフェでブルトンと落ち合った時、ブルトンもその女性とすれ違ったことを明らかにした。この二人がカフェを出

る時に、アンドレ・ドランと出食わし、ドランもその女性と出食わしてきたところだと言ったのである。そこで、「6時に、ルイ・アラゴンとアンドレ・ブルトンは謎という言葉をよく知るのを諦めることができなくて、6区のある部分を踏査したのだった。しかし無駄だった。」(PI p.258)

つまりここにおいてその謎の女性は、存在していると同時に不在なのである。正確に言うなら、この世の中に謎の女性と目される人物は存在しているが、今まさに現前していないというわけである。現前しているならば、その女性に対して言葉つまりパロールを投げかけることも可能である。しかし現前していなければ、それは不可能である。とは言えブルトンたちにしてみれば、「我々が相手にしたばかりだったのは何なのか理解したいという気持ち」(PI p.691)にとらわれているのであり、ここにおいて不在の言葉であるエクリチュールが生じることになるのである。

デリダは『エクリチュールと差異』の中で、次のように書いている。「不在は本の中で自ら生じようと試みるし、そのように言われつつ失われる。つまり不在は自分が破滅させると同時に破滅させられたものであることを知っているわけで、そしてその点において不在とは揺るぎ得ないし理解し難いものであり続ける。」(ED p.105)

そしてまた、次のようにも書いている。「本の外への全ての出口は本の中に作られる。恐らくエクリチュールの終わりはエクリチュールの彼方にあるのだ。(中略)もしそれが無限の分離を白状した上で他者に対する自己の悲痛な思いであるなら、もしそれが自己の悦楽、書くために書く喜び、芸術家の満足であるなら、それ自体自滅する。それは卵の丸みと自己同一性の完全さの中で途切れてしまう。」(ED p.113)

ブルトンが「序言」において「書いたり、更にはどんな種類でも本を出版するという行為」(PI p.645)に言及するためには、とりあえずパロールを中断して、エクリチュールに取り組みなければならない。自己同一性ということで考えるなら、その探求は失敗したということの意味するだろうし、精神分析の治療として考えるなら、失敗もしくは中止ということで捉えられるだろう。しかしだからといって、ナジャは自己同一性において全面的に否定される存在ではないし、精神分析ということから考えても、ブルトンは何ら手を差し伸べなかったというわけでもないのだ。ブルトンにとって解決策として考えられたものは、ナジャを否定することではなくて、現前していないという意味において不在にしてしまうことであり、それを明らかにするためにナジャの物語の結末部分において、敢えてナジャと呼びかけながらも、「誰だ。私一人なのか。これは私自身なのか。」(PI p.743)と叫び、自らの現前を確認することになるのである。

終章

精神分析の治療において、患者は自分の体験したこと自分の思うことを自由に語る。精神分析医は敢えて口をはさむことなく、その話を聞く。恐らく重要であるのは、自由に話したことを真面目に聞くということなのだろう。そこには信頼関係が成立していなければならない。ブルトンにとって『ナジャ』は本として完成させて終わりというものではなく、繰り返し他の人に語りたくなるものであったに違いない。

『ナジャ』のテキストのエピローグの部分においても、ブルトンが「君」という女性に対して『ナジャ』のこと、あるいはナジャのことを話していたことが十分に窺える。そしてまた『通底器』においては、テキストとして書かれている以上のことを話していたに違いないとも思われるのだ。ここにおいて重要であるのは自由に語るということであって、内容はさほど問題ではないかもしれない。もっともその中に嘘が混じっていれば、結局は信頼関係が損なわれるというか、信用されなくなるので、あまり好ましいことではない。というのも事実のみが問題であるとすると、そこには当然の如く客観性というものが要請されることになる。客観性がよくないということではないのだが、客観性というものが厳然としてあるというのではなく、具体的に言えば問主観性とか共同主観性に他ならないのである。つまり自分がただ単に思ったというだけでは主観的にすぎないのであるが、他の人たち、数多くの人たちも同様に捉えていたということであれば、そこには信頼性が生まれることになり、客観的であると見なされるようになるのである。あたかも主観的であることは何か自分勝手な思い、独善的であるかのような印象があり、客観的であることの方が好ましいということになる。ブルトンが「序言」において書いていることは、要するにそういうことなのである。「主観性と客観性は、人間の一生を通して一連の競い合いを互いにしかけるが、ほとんど早々に前者が点数で非常にまずいことになる。35年後に（かなり古びている）私が後者を援助しようと決意している際のちょっとした手当てというのは、正確な表現をいくらか考慮しているということしか示していない。」(PI p.646)

確かに誰かに何かを伝えるためには、それなりによく理解してもらえるようにという配慮は必要ではあるだろうし、それにブルトンとしても何も根拠のないことを好き勝手に言いたいということでもないのだ。ブルトンにしてみれば、まず事実というのが前提にあって、その上で自分の感じたこと考えたことをそのまま語りたいたいということであったと思われる。この事実に対する認識というのは、『ナジャ』のテキストにおいてははっきりと書かれているのだ。つまりブルトンはナジャの物語を始める前に、実際『ナジャ』のテキストの第一部となるのであるが、いくつかの挿話を書き記すのである。これはどのようなものかと言えば、生活の中でふと垣間見ることになる一種不可思議な体験ということになるだろう。テキストにおいては、ブルトンは次のように書いている。「私の人生が、最大のもので最小のもので、偶然の出来事に委ねられている限りにおいて、私がそれについて抱いているよくある考えに逆らいながら、私の人生が突然の接近、呆然とさせられるような偶然の一致、精神的なものの他のあらゆる飛躍にも勝る反射神経、ピアノにおけるように一度に鳴らされた和音、見えることになる、しかし最早他のものよりは素早くなかったとして、その時に見える（下線原文）ということになる稲妻、こういったものの世界である禁じられたものとしての世界の中に私を招き入れるまさにその限りにおいて（中略）私の人生の最も重要な挿話」(PI p.651)

つまり日常生活の中に存在するちょっとした不可思議がブルトンに何かを伝えようとしているかのような事実が問題なのであって、テキストにおいてはその後どのような事実が問題であるかが説明されることになる。それは、「恐らくほとんど検証できないが、絶対的に予想外で、激しく偶発的な性質によって本質的な価値を持ついくつかの事実に関することなのである。」

(PI p.651)

従ってここにおいて、共同主観性から導かれるような客観性を求めることはできない。事實は事實としてあって、それを受け止めるブルトンの主観を尊重しなければならないだろう。従って、「事實は純粋な確認といった領域に属するものでありながら、正確にどんな信号か言うことはできないとしても、毎回信号というあらゆる外観を提示するいくつかの事実に関することなのである。」(PI p.652)

つまり何かがあることは事実だとしても、それが何であるかはわからず、あたかも謎のように存在するわけであって、とりあえず自分としては何であるかを知ろうとするわけである。そして恐らくこれが重要なことなのであるが、その存在に気づき、それを謎として捉え得るのは、さしあたっては自分だけではないのかという思いがあり、まずは自分自身で確かめ考えることから始めたいということなのである。もちろんこのような事実にも様々なものがあるだろう。そのためブルトンは次のように書くのである。「これらの事實は等級をつけなければならないだろう、最も単純なものから最も複雑なものまで、我々にとって重大で本質的な何かがそれに依存しているという非常にはっきりとした感覚を伴っていて、非常に珍しい物を見たりこれこれの場所に我々が行ったりすることが我々の側に引き起こす特別で形容し難い動きから、はるかに我々の理解力を越え、ほとんどの場合、我々が自己保存本能に訴える時にしか我々が論理的思考に基づいた活動に戻ることを認めないあるいくつかの連鎖、あるいくつかの偶然の重なりが我々にもたらす我々自身との和解の完全な欠如に至るまで。」(PI p.652)

これらの事実というものは体験したり何ものであるかを知ってただ単に面白いということではなくて、ある種の謎として機能し、その謎の解明を求めるものなのである。従ってこれらの事実と遭遇したということは、「私にとって私自身に関するほとんど断続的な沈思黙考と空想の主題」(PI p.653)となるのであって、その主題とは、ブルトンにとって「他の人たちと比べて、私の差異」(PI p.648)ということなのである。

ここにおいて再び自己同一性という問題に立ち戻ったかのような観があるが、単純に自己同一性と規定してしまうことはできないだろう。既に指摘したように、ブルトンにとって「私とは誰か」を問題にする時、つまりブルトンがブルトンであるために特定の誰かというものを持ち出してこなければならなかったわけである。その流れで言えば、ナジャであるかもしれないし、更にはシュザンヌという女性であるかもしれないということになるのである。ところがブルトンがここで問題にしていることを仮に自己同一性の観点から捉えたとしても、つまりラカンの定義である「人間の欲望は他者の欲望である」と言う時、ここにおいて捉えられる他者とは身近にいる特定の誰かではなく、まさに大文字で書かれるべき「他者」なのである。ある種の言い方をするならば、神は私に何を望むのかといった話になるのである。従って、ブルトンは『ナジャ』のテキストにおいて「他の人たちと比べて、私の差異」について触れた後、次のように書くのである。「他の全ての人たちの中にあって私はこの世に何をしにやって来たのか、私の責任でしかその運命に応えることができないとすれば、私はいかなる独自の使命を担っているのか私がそれに気付くのは、私がこの差異を自覚すればする程正確になるのではないか。」(PI p.648)

もちろんこれは簡単にわかるものではなく、それこそ謎を一つずつ解き明かしていくようなものであるだろう。そしてその断片でも解明された時、ブルトンはある種納得するとともに、それを誰かに向かって語りたいと思うに違いないのである。例えば『ナジャ』のテキストのエピローグの部分において、既に指摘したドゥルイ氏の話が出てくる。それはこのような書き出しで始まるのである。「私は少し前一つの非常に馬鹿げた、非常に暗い、非常に心を揺すぶる話を聞かされたことがある。」(PI p.749)

この後そのドゥルイ氏の話が書かれていくわけであるが、この後テキストにおいては印字された行の間に一行分の空白があり、再び次のように始まるのである。「私は君のことをほとんど知らなかったけれども、その君(下線原文)に語りたいという欲望に私が従ったのもこの話なのだ。」(PI p.751)

つまりブルトンにしてみれば、現前する信頼できる女性に語り聞かせたい、聞いてもらいたいという欲求があるわけで、そこで語られるべき話こそ既に問題にしている諸事実だということなのである。我々としては『ナジャ』のテキストを読解する上において精神分析という観点を持ち出し、あたかもブルトンが精神分析医であり、ナジャが患者であるかのように見なしてきた。それは失敗した精神分析の治療であるかもしれない、ある意味ブルトンは自らの無実を証明するために、あるいは罪ほろぼすのために精神分析という形を装い、その証拠として『ナジャ』というテキストを提示したのかもしれないのである。我々としてはその正当性を確信しているのであるが、ブルトンにしてみれば『ナジャ』のテキストの第一部と第二部、つまりはナジャの物語を書き終えた後に、当時においては理想の女性とも言うべきシュザンヌに出会って彼女との愛に生きる覚悟を決めているわけであるから、エピローグを書いた段階においてナジャの物語の位置付けは確実に変化したのである。恐らくシュザンヌと出会う前の位置付けというのが、我々の提示した精神分析的なものであると思われる。それが変化したのである。実際ブルトンは「君」に対して、次のように語りかけているのである。「私が君と知り合う前にこの本に与えようと思っていて、君が私の人生の中に突然現われて、私の目には無駄にはならなかった結論をなかつたことにして、別な風に決めることもできると思った。」(PI p.752)

「別な風に決める」とは、何に対して決めるのか。そもそも別な風に決めるべき問題があるという認識なのか。ブルトンは同様にこのエピローグの部分において「君」という女性に言及する前の段階で、とは言いつつも既に実際の生活においてはシュザンヌと知り合っていたと思われるが、次のように書いているのである。「もし私がこの物語を、私が持っていると確信する忍耐強くそして言わば私心のない目で読み直したとしたら、私の私自身についての現在の気持ちに忠実であろうとするなら、そのうち何を残しておいたらいいかほとんどわからないのだ。私はそれをどうしても知りたいとは思わないのだ。」(PI p.746)

つまりブルトン自身このナジャの物語を扱いかねているといったわけであるが、「君」という女性が現われることによってそれなりの解決を見ることになったのである。ブルトンは「君」に対して、シュザンヌに対して、まさに現前する女性に対して、自分の体験、自分にとって常に主題であるものについて、自らの声で語りたいということなのである。そしてそれはまさにナジャの物語に他ならないということなのである。

注

- 1) 引用文の後の括弧の中に示されている略記号は、以下の文献を示している。尚、引用文については全て筆者が訳出したものである。

(PI) André BRETON, *Œuvres complètes I*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1988

Les pas perdus, pp.191-308, 1924

Nadja, pp.643-753, 1928

(PII) André BRETON, *Œuvres complètes II*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1992

Les vases communicants, pp.101-215, 1932

(EC) Jacques LACAN, *Écrits*, Éditions du Seuil, 1966

(VP) Jacques DERRIDA, *La voix et le phénomène*, Quadrige/Presses Universitaires de France, 1967

(ED) Jacques DERRIDA, *L'écriture et la différence*, Points, Éditions du Seuil, 1967

(PH) Louis ARAGON, *Projet d'histoire littéraire contemporaine*, édition établie, annotée et préfacée par Marc DACHY à partir du manuscrit original inédit de 1923, Gallimard, 1994

Une année de romans (juillet 1922-août 1923) à Monsieur Jacques DOUCET

(DS) Michel SCHNEIDER, *Marilyn dernières séances*, Grasset et Fasquelle, 2006

尚、転移の問題については次の文献を参照のこと。

Jacques LACAN, *Le Séminaire, Livre XI: Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse 1964*, texte établi par Jacques-Alain MILLER, Édition du Seuil, 1973

- 2) この冒頭の部分は次のようになっている。訳出すると、文中に埋もれてしまうが、原文ではQui suis-je? がまさに文頭に來ている。「あなたが私にこの一年間話題になった小説についての考えを求め、そして私があなたに答える時、ドゥーセさん、私は何者なのでしょう。生徒でもないし、先生でもない。でも、公共の場所、市街電車の中で出食わし、新聞を厚かましく批判しているこれらのおしゃべりたちのように、生きた存在で、というも私は26年間だらけて過ごしてきて、軽はずみではなく全てについて話す心づもりができているからなのです。私はとにかく小説について、あまり高尚でもないし、明確でもない考えしか持っていません。でも恐らく私のことが気難しいと思われたのなら、小説については少しも持っていないこの考えを私自身に関しては持っているということなのです。」(PH p.145)
- 3) PI p.1557
- 4) PI p.1496
- 5) PI p.1510